

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 8章1～11節

¹従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。²キリスト・イエスによって命をもたらず靈の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。³肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。⁴それは、肉ではなく靈に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした。⁵肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、靈に従って歩む者は、靈に属することを考えます。⁶肉の思いは死であり、靈の思いは命と平和であります。⁷なぜなら、肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従えないのです。⁸肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありません。⁹神の靈があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく靈の支配下にいます。キリストの靈を持たない者は、キリストに属していません。¹⁰キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“靈”は義によって命となっています。¹¹もし、イエスを死者の中から復活させた方の靈が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその靈によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてください。

【福音書日課】マタイによる福音書 20章20～28節

²⁰そのとき、ゼベダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。²¹イエスが、「何が望みか」と言われると、彼女は言った。「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください。」²²イエスはお答えになった。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか。」二人が、「できます」と言うと、²³イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右と左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、わたしの父によって定められた人々に許されるのだ。」²⁴ほかの十人の者はこれを聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた。

²⁵そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。²⁶しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、²⁷いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。²⁸人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

皆に仕える者になる

新年度を迎えて、体裁も新しくなった「週報」には、新しい教会標語聖句を掲げましたが、先月の役員会で協議した結果、今年度は二つの聖句を並べることといたしました。マタイ福音書とペトロの手紙一からの聖句です。

「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ。」(マタイ 4:10)

「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。」(Iペト 4:10)

役員会で、たくさんの候補となる聖句の中から絞っていったのですが、この二つの聖句を推す意見が拮抗しましたので、両方を標語聖句とすることにいたしました。どちらも、皆さんよくご存じの聖句でしょう。ただ、このように並べてみると、果たして二つの聖句が標語として両立するのだろうか、と思われる方もあるかもしれません。確かに、一見すると、二つの聖句は矛盾しているように思えます。一方は、「ただ主に仕えよ」と言い、他方は、「互いに仕えなさい」と言うのです。この二つの聖句が矛盾しないとすると、聖書は、わたしたちが何にどう仕えるべきだと教えているのでしょうか。

役員会でこの二つの聖句を選んだとき、実は、新年度最初の日曜日である今日の聖書日課に従って、すでに、この日の説教題は「月報」を通して皆さんに告知されていきました。「仕える者になる理由」。新年度の標語聖句がこの二つになるとは考えもせず、この日の聖書日課に従って出させていただいていた説教題です。けれども、標語聖句が決まり、あらためて今日の礼拝のために備えて聖書日課の御言葉の黙想をするにしたがって、「仕える」というこの言葉が、新年度の石神井教会のために備えられていた一句であったのかと、思わされてきました。

「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」(4:10) という御言葉は、わたしたちが受難節の最初の日曜日に聞いたものでした。主イエスが荒れ野で悪魔からの誘惑を受けられたときに旧約聖書から引用された御言葉です。その御言葉の宣言から始まった主イエスの公生涯、弟子たちを伴われた歩みは、今や、主イエスのご自身の受難、十字架の死と復活を予告するところまで至った。そして、ここに至って、主イエスは、弟子たちにお教えになられた。それが、今日の福音書の御言葉なのです。

「皆に仕える者になり…皆の僕になりなさい。」

主イエスは、そう弟子たちに教えられました。もちろん、それは、「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように」と言われているように、主イエスの生き方に倣うということです。主イエスご自身が「主なる神に仕える」ということを突き詰められた先で、「皆に仕える」という生き方を弟子たちにもお示しになられたのです。「主に仕える」とは「皆に仕える」ことと一つだ、ということです。

わたしたちが「仕える者」になる理由。それは何よりも、わたしたちの付き従わせていただいている主イエスがそうしなさいと仰せになられたからです。主イエスの御教えを割り引いたり差し引いたりしてよい理由は、どこにもないのです。

偉くなりたい

とは言え、主イエスは、弟子たちに、ただ一方的にご命令をくだされて、有無を言わず服従させようとなさる方ではありませんでした。むしろ、弟子たちが主イエスのお考えになられていることを理解できるように、納得できるように、そして、さらに会得できるようにと、お導きくださっているのでしょう。

主イエスは、弟子たちの中に、「偉くなりたい」「一番になりたい」という思いがあることをご存じなのです。主イエスは、弟子たちのそのような思いを、簡単に否定なさったりしていません。「偉くなりたい、などと考えるのはいけない」とか、「一番になりたい、などと考えるな」とはおっしゃられていないのです。「偉くなりたいならば…」、「一番になりたいのならば…」と、弟子たちの思いを出発点にして、弟子たちをお導きになられているのです。

弟子たちは、偉くなりたいと思っていたのです。一番になりたいという思いを持っていたのです。もちろん、主イエスより偉くなりたいと思っていたわけではないでしょう。主イエスを差し置いて一番を取ろうとしていたわけでもないでしょう。むしろ、弟子たちは、主イエスにお褒めいただけるような「偉さ」を望んでいたのではないのでしょうか。主イエスに「よくやった」と言っていただけのように「一番」を目指そうとしたのではないのでしょうか。皆さんには、そのような望み、そのような願いは、ないのでしょうか。主イエスにお褒めいただけるような弟子になりたい、主イエスに認めていただけるような信仰者として人生をまっとうしたい。主イエスを信じるということは、そのような願いや望みを心に抱くということと一つのことなのではないのでしょうか。

二人の弟子、ゼベダイの息子たちの母が、彼らのために願ったことは、主イエスが「**王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れる**」と言ってもらいたい、ということでした。何て親バカな、と思われる方もあるかもしれませんが、けれども、この母親も、あるいは息子たちも、何か世俗的な成功を求めて主イエスに願いを訴えたということでは、必ずしもないと思います。彼らの母親は、息子二人が、他の誰でもない主イエスにお褒めいただける、「よくやった。偉かった」と言っていたような信仰者として生涯を生き抜けるようにしてやってほしいと、そういう願いを訴えているのではないのでしょうか。誰にも褒められたり評価されたりすることがなかったとしても、生涯を終えて天に迎えていただくときには、ただ主イエスにはお褒めいただけるような、そういう信仰者の生涯を生き抜けると、そう保証してやってほしい、と願っている。わたし自身、三人の子の親として、わが子らの年齢が自分の洗礼を受けた年齢に近づくに従って、そういう思いを抱かないではいられずにおります。もちろん、わが子らのことだけでなく、自分自身や周囲の人たちのことも、そう願わないではいられない。皆さんも、そうなのではないのでしょうか。

けれども、わたしたちも、弟子たちも、あの母親も、そう願うときに、自分が願っていることの本当の意味を、必ずしも分かっていないのでしょうか。「**あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない**」と、主は言われるのです。

主イエスと同じように

もちろん、わたしたちは、あのときの弟子たちよりも少しは、主イエスのことを知っているのです。主イエスが何をお教えになられ、どのような道を行かれ、苦難を引き受けられ、十字架の死を迎えられたのか、知っているのです。「**皆に仕える者になり…皆の僕になりなさい**」という教えも、分かっているのです。

しかし、本当に分かっているのでしょうか。本当に知っていると言えるのでしょうか。わたしたちは、生涯をかけて主イエスと「**同じように**」なろうと、本気で思っているのでしょうか。

わたしは、牧師として日曜日ごとに説教壇に立たせていただき、御言葉を語らせていただく役目を与えられている中で、時折、不安になるのです。自分が語っていることは、本当に主イエスの導いてくださるところを示しているのだろうか。主イエスの教えを取り上げながら、それを、単なる人生訓の一つに貶めてしまっていることはないだろうか。主イエスの御業を語っていても、それを、ただの一瓶の清涼飲料水のようなものにしてしまっているのではないだろうか。御言葉を、疲れを一時的に癒して元気を取り戻すカンフル剤（効果は一週間限定！）としてしか、会衆の皆さんに受け取ってもらえていないのではないだろうか。

主イエスは、おっしゃられるのです。「**あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか**」。わたしたちは、主イエスに対して自分が何を願っているのか、本当には分かっているところがあるのです。分かっているつもりでも、主イエスから見れば、分かってない状態にまだあるのです。だから、わたしたちは、自分がキリストと結ばれた者であることを隠したり、卑下したりするのでしょうか。あるいは、自分にピッタリ合う主イエスを探し回って、さまよったりしてしまうのでしょうか。そうして、自分があの主イエスと「**同じように**」なることを、わたしたちはどこかで拒んでいるのです。このわたしと出会ってくださった主イエスに願うべきことが何なのかを、まだ本当には分かっているからです。

けれども、そんなわたしたちのことを、主イエスは、なお、ご自分のもとにお招きくださっているのです。「**飲むことができます**」と応える弟子たちに、「**確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる**」とお告げくださったのです。わたしたちが、自分で願っていること分かっている者でありながら、にもかかわらず、なおそのようなわたしたちを、ご自分と「**同じように**」してくださる、というのです。主ご自身が、そうしてくださる、というのです。

そのことを、わたしたちは今日も、主の食卓で、聖餐のパンと杯にあずからせていただくことを通して、お示しいただくのです。主は、聖餐の食卓の向こう側に着かれて、わたしたちにパンと杯を差し出してくださいます。「わたしの杯を飲みなさい」とおっしゃられるのです。わたしたちは、その差し出された杯を、受け取るのです。主と一つの杯を飲ませていただくのです。そうしてよいのです。主は、そのようにして、わたしたちと共にいてくださるのです。わたしたちが主と「**同じように**」なることができるようにと、主が願ってくださっているのです。